

極楽山西方寺・新本堂

東京事務所 所長 東 進

1、はじめに

西方寺は、宮城県の山形よりあって、作並温泉にほど近いところにある。仙台駅からは、定義行きバスに乗って、途中、大倉ダムを越えて約1時間半のところにある。西方寺のまわりは、門前町として栄え、旅館、土産物店などが軒を連ねて、平日でも大変参拝者の多い、賑わったところである。

西方寺のご本尊は、定義如来と言って、阿弥陀如来の立像のお軸である。この御本尊は、平清盛の長男、重盛が、中国の育王山に平家一門の繁栄を願って、黄金を贈った返礼として贈られたものである。当地まで持ってきたのが、平貞義（サダヨシ）で、源氏の平家追討を逃れて、名前を定義（サダヨシ）と改めて、60歳で亡くなるまで、日々の祈りをささげていたものである。遺言に墳墓の上に小堂を建て如来の御尊像を安置し、長くお守りす

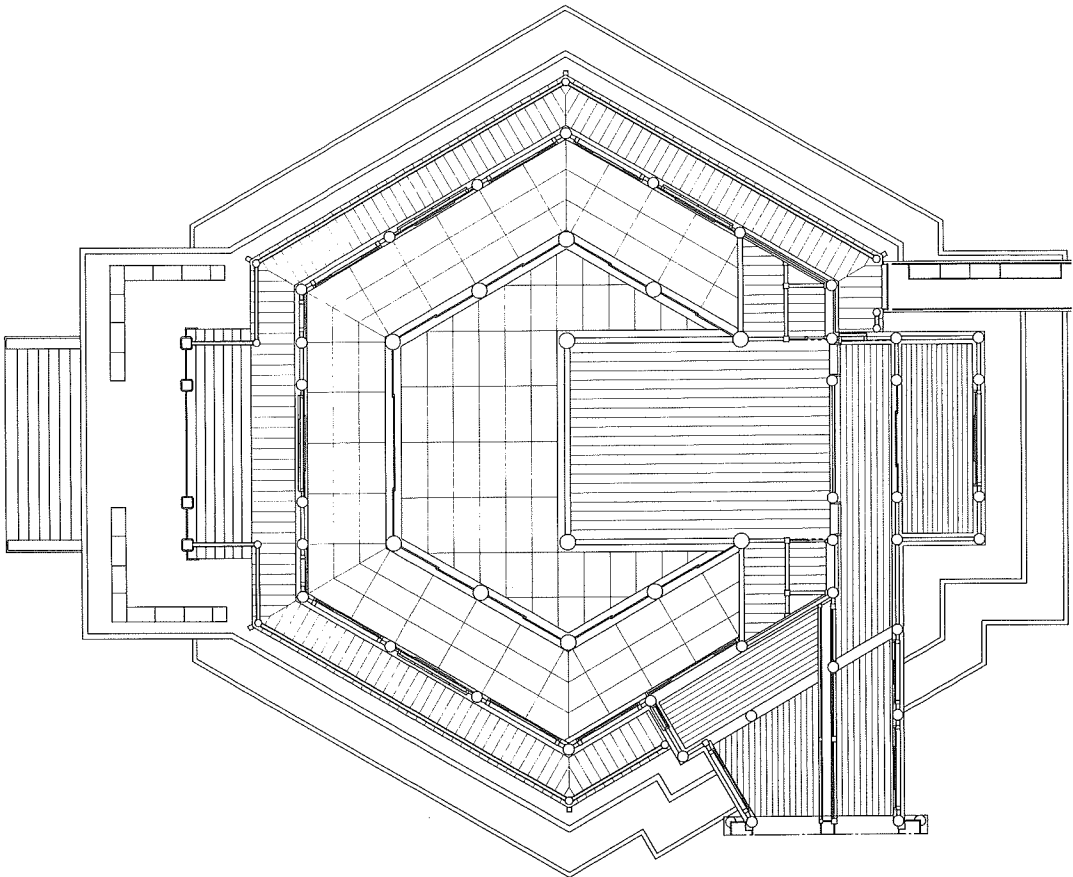


図 - 1 平面図

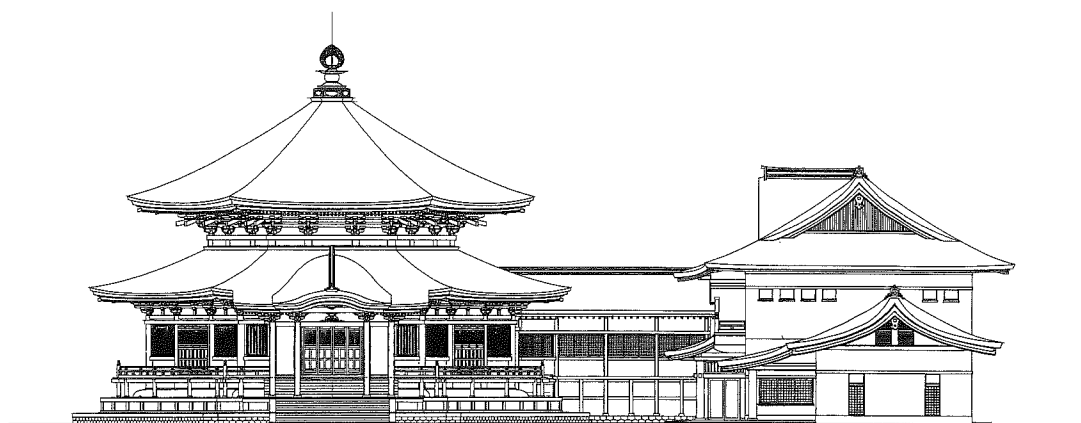


図 - 2 正面図

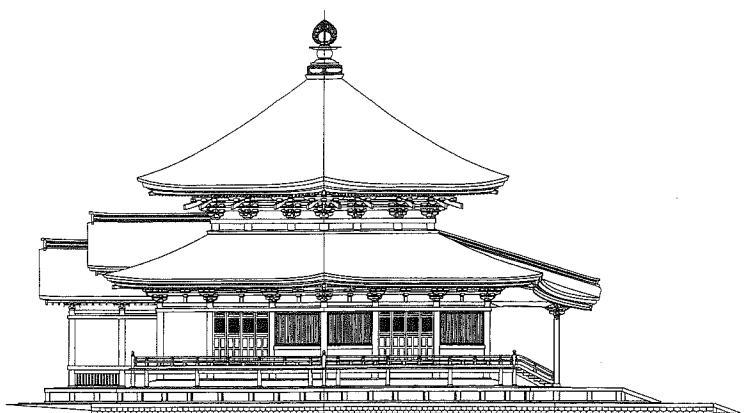


図 - 3 側面図 (西立面図)

るようにとあって、その通り、現在まで続いているものである。

明治のころに撮られた本堂の写真を見ると、まさに茅葺屋根の御堂であって、密かに願をかけるのにふさわしい、趣のあるものである。大正11年に建替えの発願があつて、昭和2年に旧本堂は落慶をしている。

形成は「廻廊下屋式」と称し、長尺の柱で身舎の屋根を受け、外廻りの廻廊を下屋にしたもので、当時、北海道の寺院に多く作られた形式である。頂部には、六角宝塔をのせ、独特の意匠を凝らした六角形の建物である。宮城県には、気仙大工という集団があつて、北海道から関東地方まで、かなり幅広く活動をしており、手掛けるものは、寺院から学校、民家まで多様である。当時その中で極めて優秀な、花輪喜久蔵と言う人が、設計をしている。細部彫刻も極めて精巧に作られており、なかなかの力作である。

近年本堂が手狭になり、新しい大きな施設が必要になって、平成2年の6月に、形は六角形、400名の入堂が可能なことを条件に建設計画の依頼を受けた。

建築研究協会はこの設計依頼を受けて、大森常務理事を中心に意匠と構造関係の技術者

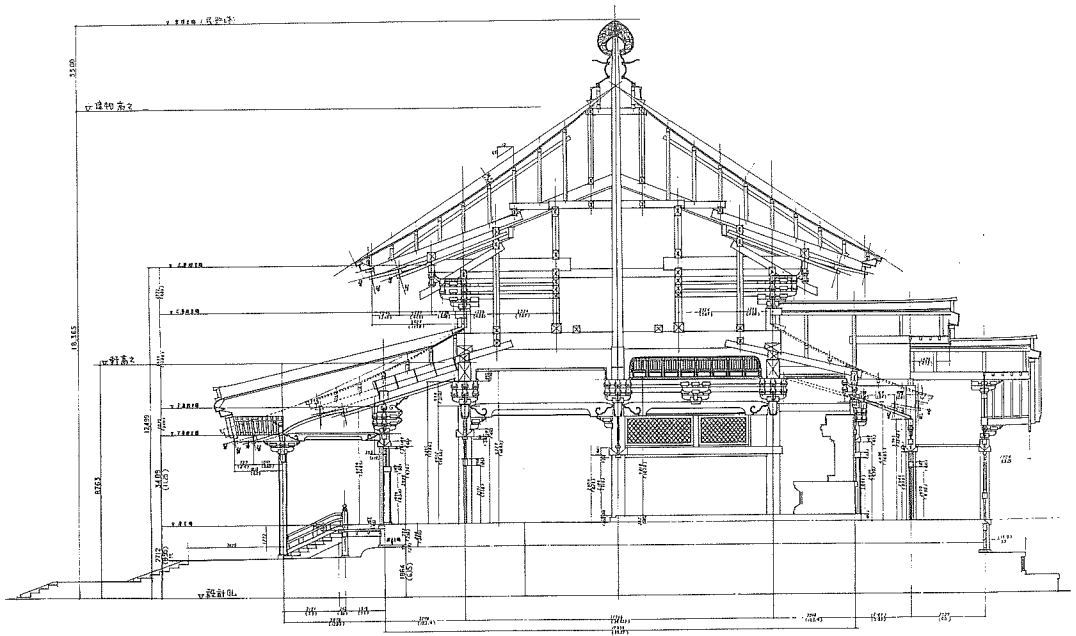


図 - 4 断面図

による基本設計に取り組むことになった。

円堂と称される多角形の建物は、大きくても興福寺の北円堂程度のもので、400名を収容する建物は日本には存在しない、全く大規模な、大木造建築になることが予想された。

400名収容ということでどれほどの規模になるかと言うと、一人当りの必要面積を、 $0.6\text{m} \times 1.6\text{m} = 0.36\text{m}^2$ 、また、内陣の間口を3.5間、奥行を3間という一般的な内陣の広さをも考慮にいれて、六角形の規模を割り出すと、内陣の一辺が6.79m、外陣の一辺が10.37mという規模になって、興福寺北円堂の3.7倍という大変、大きな規模となる。

この大規模建築物の意匠は基本的に、旧本堂に習い二層式とした。

構造形式は正面五間多面三間、六角円堂、正面裳階向拝軒唐破風付、背面向拝二重切妻屋根、上層、組物三手先組、中備間斗束、二軒扇垂木、下層、組物出組、中備双斗蓐股、二軒繁垂木、二重基壇、下部亀甲積、上部壇上積、床面積、357平方メートル108坪の建物である(図-1、図-2、図-3、図-4)。

用材は化粧材約417立方メートル1500石、野物材334立方メートル1200石、渡廊下の所用材約835立方メートル3000石、内陣は檜材、その他化粧材及び野材の内、屋根下地を除き、主要な構造材はすべて青森檜葉とした。

着工は平成5年10月、立柱を平成7年11月、上棟を平成10年11月、そして平成11年11月に落慶を迎えている。最も初期の計画から始まって、竣工まで、ほぼ10年間に要する大工

事であった。

この木造の大規模な構造に関する問題点と意匠について述べることにする。

2、構造について

六角形と八角形とでは構造上大変な違いがある。八角形の平面は、対角相互を井桁に繋ぐことができる。

つまり、正方形を隅切りにしただけのことで、構造的には安定したものになり、柱同志を繋ぐことになる。ところが六角形の平面になった場合梁は交差する一方が単一で、梁を対称的に組むことができない。水平力を受けた場合の変形をどのように防ぐかが、架構を

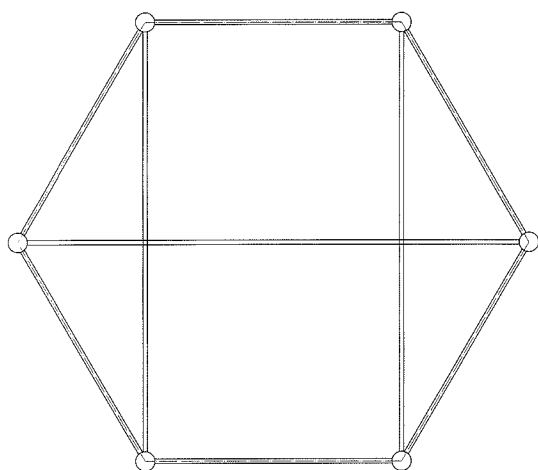


図-5 軸組

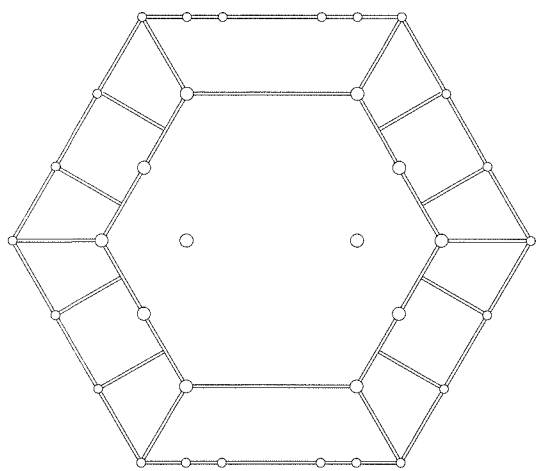


図-6 下層軸組平面図

考える上で大きな問題となった(図-5)。

意匠上、二層の屋根としたが、一般的に、重層の建物は、上下を重ねるときは必ず、下層よりも上層を縮めて、いわゆる通減していくのが通常である。

ところが、上層の面積が120平方米(36坪)もある建物で、しかも屋根を含めれば360平方米(108坪)にもなる建物の荷重に対して安易に上下の柱通りをずらすことは不利と考えざるを得ない。そこで上下層の柱筋を通すことにした。

廻廊部の架構については図-6に示すように、身舎部をつなぐのには、隅柱は対角線方向に梁を架け渡すことができる。しかし、廻廊部の柱は中間に2本あり相対する身舎部は1本であるために柱相互の梁を直行方向に架け渡すことができない。つまり、隅柱同志の繋ぎ以外は連絡できない。

このため、軒裏を化粧屋根裏形式とし、垂木尻を身舎部まで延ばして化粧垂木と裏板で構成される面合成によって構造体力を持たせることとした。

その上にかかる桔木(軒を吊り上げる部

材)は、二段重ねにし、上層身舎部の左義長柱まで扇状に配り、垂木と共に廻廊部の屋根面が身舎部に取り付く構成で安定をはかった。廻廊部の中間柱二本は垂木で挟むことによってつなぎとめ、隅柱は海老虹梁で固定した。

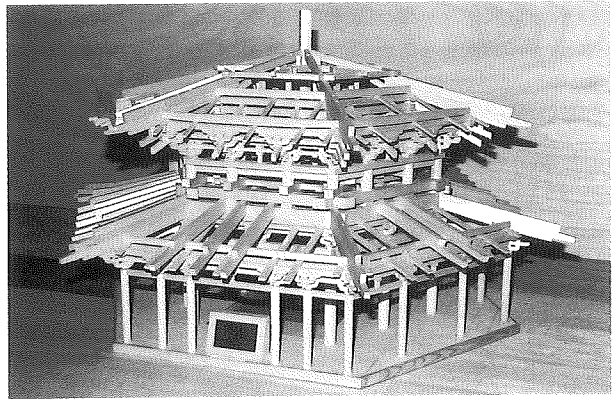


図-7 構造模型

身舎部の大梁は、基本的には前述したように、2本の梁とこれに直交する1本の梁の構成である。この梁については、建物の背骨にあたるので、大径の長尺材を必要とした。

この材料の調達については、青森県の恐山の山奥深くから、特別に目通り90cm以上のものを厳選して伐り出したものである。

この大梁の架構を骨にして、左義長束を受ける小梁等、上層面においてつなぐことができるものを総て繋ぐこととし、結果的には複雑な小梁の層が出来上がり、しっかりとした水平面の構成をつくりだした。

当初大まかな構造模型を作製し(図-7)、全体の構造の検討をした結果、更に梁材の数量を増やし、上層部の梁組を構成した。結果的には、量として、化粧材にほぼ匹敵するぐらいの小屋材を使用することとなり、全体として非常に堅固な構造となった。

上層の屋根は前述したように、面積にして358平方メートル108坪もあり、その軒の出は、柱真から屋根の最先端まで、4.2m(14尺)ある。その上当地は建築基準法上、2mの積雪荷重を考慮しなければならない。相当な荷重が、はね出した軒の上にかかる。この荷重を支えるため、組物は柱真を天秤の軸とし、はね出している長さと同寸だけ内側まで肘木を延ばし、左義長束に差し込んで、バランスをとった。丸桁には桁桔木を入れて、斗組にかかる荷重の低減をはかった。

化粧垂木は、下層は配付垂木であるが、上層は扇垂木とし、一本一本の垂木が総て力を受け持つように配慮した。桔木も扇状に配置し、はね出した長さと同寸程度奥へ挿入れ、軒を支えた。

小屋組の構造は、中央に心柱を建て、隅木を二段重ねにして差し込んだ。ちょうど傘を広げたような形になる。この傘の骨に小屋束、母屋を配して、屋根面を構成し、非常に安定した構造となっている。

この本堂は木造で軒高9m棟高13mを超える建物であるため、建設省の木質構造評定を

受け、建設大臣の認定を受けた。

3、上層斗組について

上層斗組の加構は、塔形式の架構を準用した。元来、円堂と称される建物の斗組の組み方は、隅木方向にしか、手先を延ばさない。中間にある斗組は全て、壁付の斗組で、決して前へ手先を延ばさない。そのために、塔のように、組み物が前方へ迫り出してくる斗組の力強さが無い。上層の一辺が6.8m（3.7間）もある建物で、円堂的な斗組の処理をしてしまうと、余りにも、のっぺりとしすぎて、迫りに欠けると判断した。これについては、先程述べた円堂の斗組の常識論にこだわる内部の意見もあったが、あえて三手先組の斗組とした。隅の組み方については、斗組が複雑になりすぎると、かえって重苦しく見えるので、軽快な感じで、できるだけスッキリと見えるよう、思い切って省くところは省いた。六角形の三手先組として、一つの解答例を出し得たものと思っている。

又、軒反りを結構つけたので、その反りの影響が斗組にも関係してくる。この解決方法として、一つは丸桁の下端は平らで、上端のみ天端を反り上げて、斗組は平らに組むといった安易なやり方と、隅の柱から延ばす、いわゆる「隅延び」にして、斗組全体で徐々に持ち上げていこうとする、大変込み入ったやり方の二通りがある。いうまでもなく、後者のやり方を選んだ。このやり方だと、全ての部材が反り上がりに絡んでくるので、出来上がりが全く、違和感なく自然に見える。ただしこの場合は、矩形の部材が隅に行くに従って、平行四辺形に変形しながら反り上がっていく。どれ一つ四角なものがない。部材の前後でミリ単位の差をつけて加工しなければならない。しかも六角形に組み上げる。これは大変な手間のかかる作業である。この隅延びの手法については、文化財修理報告書の図面を見ても、そのやり方を明快に表しているものがないので、私は以前から、隅木に直角方向に対してはレベルであるという、当たり前のことに基づいて、丸桁下端の反り定規をずらして行って、墨付けをやれば良いと指導してきた。このやり方が案外、大工さんにも直ぐ理解できる。隅延びというのは、理論的には難しいものではないが、ただただ、非常に面倒なものである。現場においては、原寸模型をこしらえた上で、実際の部材を加工し、現場に搬入する前に、仮組みまで行った。この斗組の高さだけで、人の背丈を越える。

日本建築というのは、面白いもので、大きくても小さくても、パーツとしては、同じものを使っているので、時として、そのスケール感を図面上では感じていない場合もあるが、この仮組みをした時点で、この建物はやはり大きなものだと、痛感した。

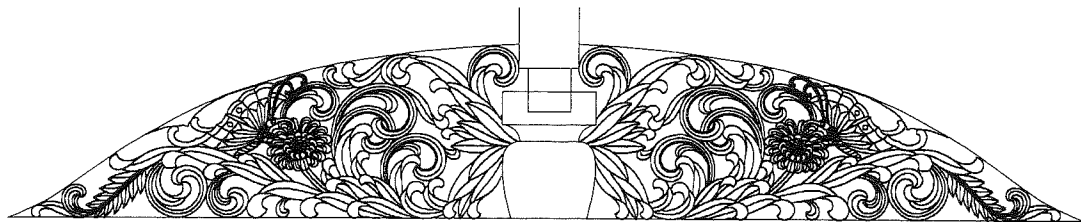


図-10

その域を余り逸脱しないものとした。しかし、旧本堂は、花輪喜久蔵氏の写実的な彫刻群で埋め尽くす秀作であるので、ここまで近世社寺風にしなないまでも、全体としてかなり意匠を凝らさないと釣合がとれなかった。そこで写実的なものとは対照に、文様を徹底的にデザイン化したものでまとめることとした。西方寺の寺紋は、平家の紋所の「丸に揚羽蝶」である。この蝶は非常にデザインしやすい素材であるので、蓼股を除く、木彫と飾金物類はすべて、蝶をモチーフとしてまとめることにした。

木彫の代表例として、向拝中央唐破風の笄形がある。これは、真正面を見上げるところの一番見せ場になるので、若葉で全体の流れを作り、その中に花を一輪、その花に蝶が止まって、蜜を吸っているデザインとした。図-10に示す。この中にも隠し絵的なものがあり、太瓶束を蝶の胴に見立て、若葉を全体的に羽根にまとめた。又、結綿も蝶にして、蝶の中に蝶があるといった、凝った意匠とした。向拝両端に木鼻があるが、これも同様な考え方でまとめた。

本堂内部には、柱と柱の間の中備として、蓼股を配置する。合計で19の蓼股があり、19個すべて違う文様でまとめようと考えた。ただし、意匠がバラバラになっては困るので、テーマを花に決め、木に咲く花として、桐、梅、桜、紅葉、藤。草花として、菖蒲、鈴蘭、水仙、桔梗、菊、小菊、朝顔、蓮、牡丹、杜若でデザインした(図-11)。基調はあくまでリアルなものにせず、あくまで中世風な唐草のもっていき方の中で、各種の花を取り込んだ。

工事中は、建て方の都合上、総ての蓼股の出来上がるのを待って組み上げる時間がなかったため、文様抜きの蓼股をまず嵌め込み、彫刻は後嵌めとした。

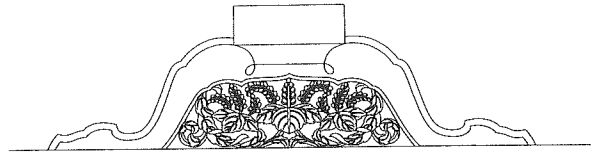
飾金具は、垂木小口、茅負、裏甲、隅木、破風、扉金物、高欄金物、長押金物、階段小口金物、欄間金物、天井金物と多種にわたった。

これらも、デザインの考え方として、遠くのもの、文様も粗くし、遠目で見ても文様が判別できるものとし、比較的目に近いところのものは、細かい文様にして、目を凝らして眺めても、鑑賞に堪えられるものとした。文様は前述したように全て蝶のデザインとした。ただし、デザインも、唐草文様とすると、概して、文様として、密度の濃いところと、

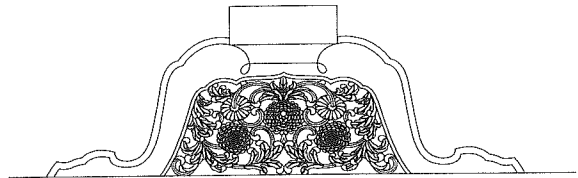
薄いところがどうしてもできてしまう。金と墨差しで仕上げると、金の部分と、墨の部分が均等に混じらず、見苦しいものになってしまうことが多い。

そこで、文様を幾何学的文様として、出来上がりの金と、墨のバランスが均等になるようデザインすることとした。この手法は、日光の建築群を参考にした。たまたまこの時期に、日光山輪王寺の護摩堂も手がけていたため、日光を訪れる機会がよくあったので、その度毎に、金物や彫刻の写真を撮ってきては、勉強させてもらった。

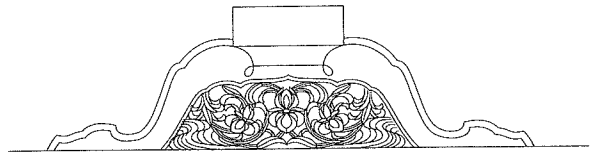
そこで気のついたことは、日光の建築群は東照宮に代表されるように、写実的な、しかもどれ一つとして同じものがないという、江戸時代の技法が集大成されたものであるが、リアルな彫刻群の周りをしめる極彩色塗や、飾金物群は、大体が幾何学文様の繰り返しパターンでまとめられており、そのために額縁的效果となっており、リアルな彫刻がより以上の効果を発揮できているのではないかと考えた。これが総て唐草でまとめたしまったら、大変うるさくなって、逆に総てが見苦しくなるのではないだろうか。そういう観点から、飾金物は幾何学的繰り返しパターンでやることに決めた。文様の粗さは、



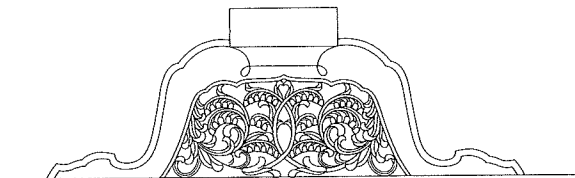
臺股図案（桐）



臺股図案（菊）



臺股図案（かきつばた）



臺股図案（すずらん）

図-11

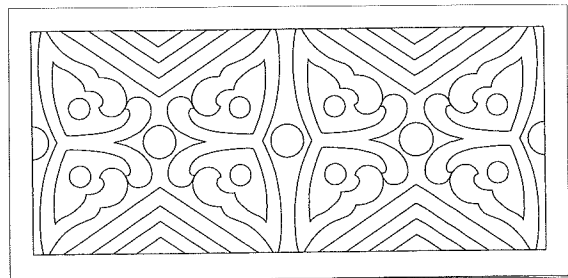


図-12

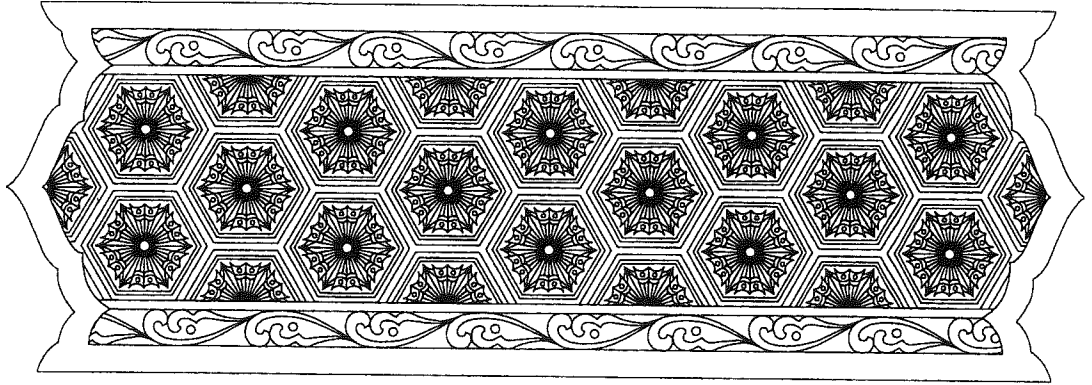


図-13

まず垂木の小口が遠くから判別できることを条件に現寸の決定を行った。図-12に示すように、蝶の羽根の文様、尾垂木小口は、その繰り返反転文様としている。現寸図の段階で実際に見る距離に離して、幾度も確認を行いながら決定をしていった。これを基に下に降りていくにしたがって、文様を細かくしていった。図-13に示すように、脇壇の框金物などは、かなり細かい文様となった。

また、天井金物については、金物自体も網目調の透かし文様として、格縁に巻き付け、格縁の中心に七宝焼きの唄を付けるという、これも5m以上ある天井に付くためその効果を確かめた上で決定をした。このように、細かい文様のものは、エッチングの上、墨差しとした。結果的に意図していたように、建物全体にふんだんに取り付けられた金物が個々にその存在を主張することなく全体として嫌味なく、しかも豪華にまとまった。

5、その他

秘仏は防災上耐火金庫の厨子を宮殿内に納めることにした。旧本堂にも耐火金庫の厨子が納めてある。余談になるが、既存の宮殿の中に、この厨子を納める依頼を受けたのが、西方寺様の最初の仕事である。

この時は、既存の宮殿の実測図面をこしらえて、ギリギリ納まるよう耐火金庫の厨子を設計した。

完成した厨子は、床下からジャッキアップをして納めた。日中は、お詣りがあるので、日没からの徹夜作業となった。

この厨子は、来迎壁後ろにハンドルケースをセットして、それを回転させると、扉が開く設計になっており、御開帳の折など静かにスーと開くものだから、極めて調子のいいものであった。

今回はその経験を踏まえて、二度目の設計となった。今回は半円形の筒状の形にし、扉は円弧状を回転するように引き込む設計とした。

後で分った事だが、製作を担当した人に聞くと、そのような扉は、コンピューター制御による機械加工になって初めて、製作可能になったものであるらしい。円弧状を滑るように開くものだから、より滑らかになって、なかなか出来の良いものであった。

残念ながら、普段は秘仏であるので、閉じたままで、中を拝見することはできない。これは、金庫という特殊金属を加工した技術であるが、金属でも鋳型を使ったものに、屋根上に乗る宝珠露盤がある。この建物にマッチするものであるから、大きさも3mを超える、宝珠露盤としては、最大級のものであった。下から見上げた時、請花付として華やかなもの考えた。ただ積雪があるので、請花は透しとし、雪がたまらないよう配慮した。

これは曲面になるので、図面では正確に書けず、図面から粘土で作ってもらって、そこで粘土を削ったり、つけたたりして最終の形を決定している。水煙も含め透し文様としているので、遠目から見てもなかなか軽やかで、美しいものに仕上がっている。

以上が本堂に関しての特徴のある点であるが、本堂の設計と同時に長さ77m、延べ面積1800㎡の大寺務所棟を設計している。この寺務所棟と本堂を結ぶのに、木造の渡廊下でつなげている。この渡廊下と本堂の接続が意外に難しかった。本堂の内陣後方に仏具庫をこしらえ、間取りとしては、後ろに飛び出ることにしたため、屋根は内陣との関係で二重切妻屋根としている。この部分に渡廊下が接続となるが、条件として、渡廊下の棟は下層の屋根の峰を越すことができないし、二重切妻屋根に直交して、自然につながっていかなくてはならない。又、渡廊下の斗組は、下層の出組より簡略化を図らなければならず、又、桁の高さも限定されている等々、直角の軸線と60度に取り合う軸線の交差する状況を図面化するのに、ずいぶんと頭をひねったものである。おかげで、現場ではうまく納まり、六角形から抜け出して行く渡廊下が、自然な感じで、違和感なしに出来上がった。

こんな風にして、いろいろな面で西方寺の建物は、自分ながらの独自色を随分と出すことができた作品である。

完成後の評判も上々で、特に大工さんの興味を大いに引くところがあるらしく、工事中もそうであったが、完成後も大工さんのいろいろな会で、研修の一環として、見学にこられているらしい。参詣の方々から褒めていただけるのも大変有難い。プロ同士の研修に供されていることもなお、うれしいものである。工事終了後、「西方寺新本堂創建と工匠たち」という記念誌が発行された。この文中に使用した写真はこの記念誌より転載させていただいた。